

私たちは世界遺産を育てている

“のとキリシマツツジの郷”構想のアイデアを話し合う

【趣旨】

木を見て森を見ずと言うが、私たちはのとキリシマツツジの赤い花ばかりに目を奪われ、その根元に気づいていないのではないだろうか。奥能登には樹齢100年超の古木があちこちの民家の庭でしっかり根を張っている。これは世界遺産クラスの文化である。人と花木のこの美しい共生を百年先まで続けるために、なにをなすべきか。栽培主の高齢化、空き家の庭の花木管理など問題は多々ある。里山を歩き、庭を見ながら能登の未来を考えよう。

【ゲスト】

宮本 康一

NPO法人のとキリシマツツジの郷 理事長

奥能登の各地で頑張っている「のとキリシマツツジ」に魅せられた人たちを組織し、平成21年に上記のNPO法人を設立。

倉重 祐二

新潟県立植物園 副園長

平成18年にのとキリシマツツジの学術調査を行い、推定樹齢100年以上の江戸キリシマが286個対存在すると学会に発表し、のとキリシマツツジの存在に光を当てた。

廣野 拓雄

有限会社清港廣園緑化 代表取締役

耕作放棄地の問題を、県の建設業復元化支援を活用し、自ら農業に参入することで解決に乗り出す。

【コーディネーター】

山崎 昭宏 株式会社ぶなの森インタープリター

埼玉から能登に移住して4年目。2012年夏に全行程450kmの能登半島一周歩き旅を敢行した。

協力団体 ● NPO法人のとキリシマツツジの郷

会場 ● 柳田教養文化館

参加者 ● 29名

1. 分科会要約

宮本康一氏から

「のとキリシマツツジは園芸品種であり常に人と共に、人の手によって郷に生きてきた。保護普及のために金沢で10年、最近では東京、神奈川、京都での展示会を行ってきた。知名度は上がるものの、一般の人と会員との間の意識のずれを感じる。また単に展示しているだけでは会員に負担をかけ、力尽きてくるように感じている。今後どうしていけばよいのだろうか？なんとか世界遺産にならないだろうか？世界遺産になれば郷が元気になる。人が息づき生活のある郷が消えてはのとキリシマツツジも残していくことはできないのであるから。」

倉重祐二氏から

「のとキリシマツツジは大きさ、奥能登を中心にした広域における古木（樹齢100年以上）の個体数、品種数において日本一なのである。いや世界一と言える。この地域のたからに人を寄せたい。どこからきたのかはまだわからない部分があるがDNAを調べると能登独自のものではなく江戸から来たものが残ったということが分かっている。可能性として参勤交代や北前船の関与も考えられる。今後ルーツの解明も進んでいくであろう。それと共に古木の台帳整理、保護育成、後継者の育成、地域と産学官の連携、のとキリシマツツジを核とした文化の発信が求められる。」

廣野 拓雄氏から

「造園業から見て。のとキリシマツ

ツジを工事に入れることはほとんどない。それは 価格が高いから。挿し木の活着率が低く成長も遅いことなどもあるが一番はのとキリシマツツジへの思いが強いからではないか。人の気持ちや先入観が価格を高くしているように思う。また、のとキリシマツツジは過保護にされているように思う。古木500本みなそのように育ってきたわけではないだろう。もっと自由に育てほしい。」

外で風車の形に机を並べ ディスカッション（青空のもと 自由にアイデアを！）

ウノヤの キリシマツツジ（峨山キリシマツツジの元祖）の実話から学ぶ認定されなかったものの県文化財級ののとキリシマツツジが持ち主の事情で売買され能登から出て行った。2度の移動をしたが 移植に失敗し、また持ち主も変わり誰なのか分からない状態になり衰弱していくのを見ているしかなかった。のとキリシマツツジの古木の管理をしているのは 現在年配の人たち。維持するにはお金がかかる。のとキリシマツツジが能登から流出するのは仕方ないのか？

ここで山崎昭宏コーディネーターからライオンの価格のクイズが出されました。1、13万円 2、85万円 3、515万円 正解は1毛皮、2生体（生け捕りされ、サーカスや動物園へ）、3サファリツアーでもうける1頭当たりの金額。のとキリシマツツジにも 応用できないだろうか？

高校生をターゲットに のとキリシマツツジを総合的に学習する時間を設ける。次世代の古木を考え、若い苗を育てる、普及する。ビジネスにし生活の基盤になるようにする。若い人を組織に加える。子供のうちから守り育てる機運を作るなど様ざまな意見が出た。

また、価格を落として普及すべき。数量を制限し付加価値をつけ価格は自分たちでつけるという意見交換もあった。

最後に赤須コーディネーターから能登の人は勇気や想像力にはたくましいがお金の話には弱いのでは？ないか。お金を生み出す仕組みを作る努力をしなくてはならないのではないか、風車の形に置いた机の羽の部分には考えてみてもいいのではないかという呼びかけがあった。他の地域からのサポーターを募って〇〇家の由緒書やナンバーのある苗木を売るなど調査、交流、観光、NPO、所有者、ビジネスの紙があり参加者が思いついたアイデアをふせんに書いて貼り付けていった。



2. 開催で得たもの（新しい発見）

お金やビジネスの話をしてこなかった。マニアの中ののとキリシマツツジ、ではダメなのだ。



3. 分科会まとめ

人と共にある のとキリシマツツジは時代を映す鏡。風土そのものであるのとキリシマツツジの持つ問題の解決が 能登の抱える問題を解決することにつながる。いかに守りいかに受け継いでいくのか？これはすべての問題に共通する。

4. 今後に向けた展開

サポーター制やナンバー制など他の地域からの支えを得る仕組みを作ったりビジネスにつなげる仕組み作りが必要である。

5. 参加者の声

関心を持ってもらうことが大事。管理ノウハウをビジネスとして組織で維持していく。